

反論の言語行為実現における語用論レベルでの転移

成瀬 真理

Pragmatic Transfer from L1 to L2 by Japanese Speakers of English in Expressing Disagreement

Mari NARUSE

はじめに

外国語を学習する際の、母国語から対象言語への影響、転移の研究は、第二言語教育における一つの分野であり、統語、音韻、語彙、など様々な領域で研究されてきている。異言語間語用論のレベルにおける母国語の影響、転移についても、感謝 (Eisenstein and Bodman 1993)、謝罪 (Garcia 1989, Bergmen & Kasper 1993)、賛辞 (Wolfson 1989)、拒否 (Beebe et al. 1990) 等の言語行為の実現の場面における分析が進んでいるが、反論の言語行為については、まだ母国語と対象言語の十分な比較がなされていない。反論は、コミュニケーションにおいて避けられない言語行為であるが、文化によってその行為を実現することに対する心理的負担の度合いも異なり、特に異文化間コミュニケーションにおいて様々な誤解のもとになってきた。そこで、本研究では、英語で反論をする際の日本語からの語用論レベルでの転移について分析することとした。

1 異言語間語用論と語用論レベルでの転移

異言語間語用論 (interlanguage pragmatics) は、まだ比較的新しい言語学の分野であり、第二言語習得研究と語用論にその理論の基礎を置いている。Kasper の定義によれば、異言語間語用論とは「非母国語話者がどのように対象言語の言語的活動を理解、遂行しているか、また第二言語の語用論的知識をどのように習得するかを研究する、第二言語習得研究の一分野」である (1992:203)。

その中でも、語用論レベルでの転移 (pragmatic transfer) の研究は、外国語学習者の母国語及び文化の語用論的知識における影響をその対象とし、これ

までの多くの研究は negative transfer、すなわちコミュニケーションにおいてマイナスとなる転移についてなされている。つまり、母国文化の語用論的基準を第二言語において使用することによってその言語の話者に誤解を与えてしまうような場合についての研究が殆どなのであるが、それは、円滑なコミュニケーションが第二言語習得研究の目的の一つと考えればきわめて自然なことである。

Thomas はこのような語用論レベルでの転移による失敗 (語用論には絶対的な規則というものはない為、語用論的能力の欠如によるコミュニケーションの疎外に対して Thomas は「誤り (error)」ではなく「失敗 (failure)」という語を使用している) には pragmatic failure と sociopragmatic failure の二通りがあり、言語教育においてもその二つを区別して指導するべきだとしている (1983)。Pragmatic failure とは母国語と第二言語の語用論的効力 (force) が組織的に異なるためにおこる失敗である (例えば、感謝するつもりで I'm sorry. と言うなど)。それに対し、sociopragmatic failure とは、母国の文化と第二言語の文化の社会的な違い (例えば社会的な距離、権利、義務に関する価値観の違い) によっておこる失敗である。知人に対して不自然に丁寧で距離をおいた表現を使用してしまうことなどが、その例として考えられる。このような pragmatic failure と sociopragmatic failure は、はっきりと分類をするのは困難な場合もあるが、語用論レベルでの転移の分類を考える基準として多くの研究に使用されている。

2 「反論」の言語行為

Brown & Levinson (1987)は、人が間接的な発言をする動機を「ポライトネス」と呼び、それをGoffman (1967)のフェイス(面子、「顔を立てる」というときの「顔」という概念を中心に説明している。彼らによれば、フェイスは消極的なものと積極的なものにわけられ、前者は個人の領域や決定権の要求であり、後者は自己の肯定的なイメージの保持への欲求である。これらのフェイスの欲求を脅かす言動を彼らはFace Threatening Acts (FTAs)と呼び、コミュニケーションにおいて、これらのFTAを行おうとすると、お互いのフェイスを保持するために人は間接的な表現をする等様々なポライトネス方略を用いる、としている。

反論とは、ある人の発言に対する話者の見解の不一致を表すものであり、他人の発言を否定するという、他者の肯定的なイメージを傷つける重大なFTAである。特に和を大切にと言われる日本社会では、他者の意見に対して反論することは非常に難しい。その為、商業的な交渉などにおいて、日本人は決してnoと言わず、yesという際の言い方によって、本心からyesと思っているのかどうかを推し量らなければならない、等という不満を外国人から聞くことにもなる(Tannen 1984)。しかし、本当に日本人は決してnoと言わず、直接的に反論しないのだろうか。また、例えば概して直接的であるという印象を持たれがちなアメリカ人は、いつでも直接的に他者に反論しているのだろうか。このような、ステレオタイプによるコミュニケーションの疎外、誤解を防ぐためにも、反論の言語行為を異言語間語用論の観点から分析することが必要であろう。

しかし、反論については意外に語用論の面から分析された研究は少ない。Beebe & Takahashi (1989)が、英語における日本人とアメリカ人の反論のしかたの違いを分析しているが、その研究には日本人の日本語によるデータが含まれていない。また、分析は筆記によるアンケートで集めたデータが中心で、自然な会話のデータは詳しく示されていない。そこで本研究では、筆者によって集められた日本人の日本語によるデータをBeebe & Takahashiの分析結果と照合し、反論についての異言語間語用論的理解を深めたい。

3 Beebe and Takahashi (1989) における日本人

とアメリカ人の英語による「反論」

Beebe & Takahashiの研究では、反論の言語行為を分析するのに2種類のデータが使用されている。一つは自然の会話を書き留めたもので、もう一つは談話完成テスト(DCT)である。談話完成テストとは、筆記で行うアンケート調査のようなもので、調査者がある状況を設定し、被験者がその場に立った場合どのような発言をするかを書いて答えるものである。ここでは、状況は地位の高い者から低い者への反論と、その逆の場合が設定されている。例えば、状況1は、「あなたは重役で、部下が秘書の仕事についての提案を書いてきてその長所を説明するが、あなたはその提案は役に立たないと思っている。」というようなものであり、その中で被験者がどのような方法で反論するかを調べている(例えば、「批判する」、「肯定的な意見を述べる」等)。被験者は英語話者15人と日本語話者15人で、テストはすべて英語で行われている。

分析の結果は次のようなものである。まず自然な会話からとったデータからは、日本人は地位が上の人に対して、反論をする代わりに何度も質問をする傾向が報告されている。これは、自分が賛成しかねる相手の意見を何度も確かめることによって、遠回しに自分がその意見に反対であることを伝えようとするものであり、日本人にとっては理解しやすい反論のシグナルであるが、アメリカ人にとっては時間の無駄、あるいは自分の誤った意見を何度も言わされ、馬鹿にされたように感じさせるものである。アメリカ人が質問によって反論を匂わせることもあるが、質問の内容は多少なりとも批判を含むもので、日本人がする純粋な質問とは異なる。

次にDCTの地位の高い者から低い者への反論のデータでは、直接的に批判などを使って反論する割合は日本人の方が高く、アメリカ人が1人として使用しなかったI don't agree.という表現を日本人が使用している例も報告されている。また反論を和らげる手段としては、半分以上のアメリカ人が相手を肯定する意見を添えて反論しているのに対し、同じ手段をとった日本人はおらず、全体としてアメリカ人の方が間接的な反論をしているという結果が出ている。また地位の低い者から高い者への反論では、日本人の33%が相手の意見に対しyes、また20%がnoと言っているのに対し、はっきりとyesあるいはnoと言っ

いるアメリカ人はいない。また相手に対する直接的な批判を述べている人の割合は、日本人の方が多くなっている。

4 日本人の母国語と英語による「反論」

筆者はNaruse(1993)において、日本人の母国語と英語による反論の方法を、ポライトネス理論に基づいて分析した。その際使用したデータは、①日本語によるDCT(20人の日本人大学院生に依頼)、②日本語による会話(英語教員の経験を持つ3人の日本人大学院生が、英語教育についてインフォーマルに話し合っているのを録音して書き起こしたもの)、③英語による会話(日本人大学生の英語の授業や昼食の場面を録音して書き起こしたもの)の3つである(Appendix参照)。ここではこれらのデータを、Beebe & Takahashi(1989)で提示された視点から分析しておいてみることにする。結果は次の通りである。

まず、①のDCTにおける地位が高い者から低い者に対する反論の状況としては、「弟と見た映画について、弟はとてもいい映画だったと言っているが、自分はあまりに底が浅くおもしろくなかったと思っている」という設定にした。この状況では、被験者の70%がはっきりとした批判を伴った反論を行っており、20%が質問の形で反論を匂わせ、反論をしないと答えた被験者は10%であった。また、肯定的な意見を添えて反論をした人が1人いた。非常に目立ったのは「そうかなあ」「えー」という発話で始まる返答で、75%に上った。これは、わざわざ語尾を上げて、と注を添えた被験者もあり、広い意味では質問という手法を使った反論とも言えるだろう。英語のI don't agreeに匹敵するような表現はなかったが、同じように直接的な「全然いいと思わなかった」「どこがいいんだ」などの反論をした人が25%であった。

地位の低い者から高い者への反論では、以下のよう二つの状況が設定された。

(1)大学の先生と2人で話しており、先生は日本でも勉強できるので留学の必要は無いと言うが、自分は留学がしたいと思っている。

(2)大学のセミナーで、ある論文について先生はとてもよい論文なので読むことを皆に勧めるが、自分はその論文のデータの分析が不適当だと気づいている。

(1)においては、批判を伴って反論する人が65%、

反論をしない人が20%、質問の形で反論の意思を暗示する人が15%であった。(2)においては、批判を伴って反論する人は40%に減り、反論しない人と質問によって反論を匂わせる人が各々30%に増えている。また、反論をする人の中でも肯定的な意見を添える人が(1)と(2)で4各人、3人であった。また、yesにあたる「はい」「ええ」という返答をした人が各2人と5人いたが、noにあたる返答をした人はいなかった。あいまいな「そうですか」の返答を用いた人は各5人、4人である。また、地位の上下を問わず、DCTのデータ全体的に見て、「……だと思うのですが」「……なのではないでしょうか」等の表現(Brown & Levinson (1987)ではhedgingと分類される)が非常に多く使われていた。

②の日本語による会話に参加している3人の大学院生は、社会的には共に大学院に学ぶ友人どうしであるが、年齢は数才ずつ離れており、Aが一番上で、次がBであり、Cが一番若い。ある一定の時間内での反論の回数を見てみると、AはBに対して3回、Cに対して4回反論しており、BはAに対して一回、Cに対して2回、Cは一度も反論していない。以上のうち、BがAに対して行っている反論は、その前の自分の発話に反論をされた為、自分の前の発話を補足説明する形になっている。以上のことを考えると、年齢が上の者ほど反論する回数が増えていることがわかる。反論のしかたとしては、Aは5回が質問の形をとっており、一回は「……かもしれないでしょう。」というhedging、もう一回は冗談を混ぜている。Bは質問の形で1回、あとの2回は、反論とも説明ともとれる、間接的な表現を用いている。

③の英語による会話は、日本語の会話とは違って、殆ど年齢的に差がない日本人大学生によるものである。録音された会話の中の反論には、日本語の会話ではみられなかったI don't think so. No, no, I don't think so. 等の直接的な反論がいくつかあった。また、日本語のDCTで多く見られたhedgingの表現はあまりなく、質問の形の反論が、1人の話者から連続して2回行われていた。

5 「反論」における日本語から英語の語用論レベルでの転移

Beebe & Takahashi(1989)の分析と本研究の分析結果を比較して、日本語から英語の語用論レベルで

の転移について考えてみたい。

5. 1 立場の高い者から低い者への反論

Beebe & Takahashiにおいて指摘されていた、「日本人は自分より立場が低い者に英語で反論するとき、英語話者と比べて批判などを伴った直接的な形でする人が多い」という点は、本研究で用いた日本語のデータからも同じ傾向が見られることから、日本語からの転移であると考えられる。日本語の会話のデータで、年齢が上の者ほど反論の数が増えていたのはそれを示す典型的な例であろう。このような転移は、日本の社会での上下関係に対する意識の強さを示すものであり、前述のThomas(1983)による分類に従えば、sociopragmatic transferに含まれるものである。

また、日本語のDCTデータでも、年齢が下の者に対する直接的な反論の多さが目立ったが、これは、設定された状況が「弟への反論」であり、立場の上下だけではなく、社会的な距離の近さも直接的なFTAをする動機となったのではないとも考えられる。

5. 2 立場の低い者から高い者への反論

Beebe & Takahashiは「英語話者はyes, noをはっきりさせずに反論に持っていきが、日本人が英語で話す際33%が相手の提案に対してYesと返答し、20%がNoと返答している」と報告しているが、本研究で用いた日本語のデータでは、Noにあたるはっきりとした否定の返事をしている人はいなかった。従って、これは日本語からの転移というよりも、日頃「Noと言わない日本人」等という外国人からの批判を意識しすぎた、心理的な要因によるものではないかと思われる。また、Yesにあたる日本語での返答としては「はい」「ええ」などが使われていた。これらの表現は日本語では、相手の発話の内容を肯定するYesという意味よりも、相手の発話を受けた返事、あるいは次の自分の発話までのフィラーという意味合いが強く、それを英語のYesに置き換えた、pragmalinguistic transferと言えるのではないか。また、日本語では多くの人は「そうですか」という曖昧な返答をすることによって、yes, noをはっきりさせずに反論につなげていたが、英語でのDCTではそれにあたる英語表現を思いつかずに、yes, noを使ってしまったということも考えられる。

また、Beebe & Takahashiでは、立場の低い者から高い者への反論でも日本人に直接的すぎると思わ

れる反論が見られたと報告されている。この点について、日本語のDCTでは、状況による違いはあるにしろ、批判を伴う反論をする人が40-65%になっている。しかし、本研究で用いた日本語の会話のデータでは、そのような例は全く見られなかった。これについて、日本語のDCTと会話の両方のデータの提供者である、大学院生Cの例で考えてみよう。Cは会話に参加した3人の中で一番年齢が下で、反論は一度も行っていないが、DCTの中では、インフォーマルな場では説明を伴った反論を行い、またフォーマルな場では質問の形で反論を匂わせている。この違いについて、Cは後に口頭で「会話においては、内容が英語教育についてであり、年上の教員達の方が経験も豊富であるので反論はしなかった。また、説明を伴った反論をDCTで行ったのは、話題（留学をするべきか否か）が自分の将来に関することであり、自分はどうしても留学をしたいという意思が強かったので、実際の会話であっても同じように反論したと思う」と説明した。この説明は、反論についての語用論的判断は、立場のみではなく、話者の話題への関与の度合いや反論をする権利なども考慮にいれて行われることを示すものであり、転移については、これらのことも基準に入れたより多くの状況に関する日本人、アメリカ人のデータの分析の必要性を示すものである。

5. 3 反論の方法

日本人が、納得がいけない点について繰り返し質問をすることによって間接的に反論するという手法は、Beebe & Takahashiでも指摘され、また本研究で用いた日本語のデータでも多く使われており、日本語からの転移と言えるだろう。この手法には、質問することによってもう一度相手に考え直させ、必要であれば相手が自ら訂正できるようにする、という意図があり、相手の決定権を尊重する、消極的ボライトネスの方略と考えられる。日本人はこのような反論の手法に慣れているため、このような質問の形をとった間接的な反論と純粋な質問とはすぐ見分けがつくが、Beebe & Takahashiが言うように、異文化の人々にとっては単なる質問と区別がつかず、コミュニケーション上の誤解を招くもとになりかねない。

一方、多くのアメリカ人に使用された、肯定的な意見を添えて反論する、という手法は日本人にはあ

まり使用されなかった。この手法は、相手の肯定的な自己イメージを保つ、という意図で、相手の積極的フェイスを維持する方略であり、日本人が相手の消極的フェイスを維持しようとしたのとは対照的である。相手のどのようなフェイスを維持しようとするかは、話者の母国の文化や社会の仕組み等によって左右される。従って、このような転移はsociopragmatic transferと分類することができる。

6 結 論

以上の分析の結果、日本人による英語での反論の言語行為実現において、語用論のレベルでも転移がおきていることがわかった。今回確認された転移は次のようにまとめることができる。

I Pragmalinguistic transfer: 相手の発話の内容の肯定としてではなく、返事、フィラーとして、yesと答える。

II Sociopragmatic transfer: ①立場が下の者に対してあからさまな批判などを伴った直接的な反論をする。②質問を繰り返すことによって、間接的に反論の意思を伝えようとする。

その他、転移とは区別すべき語用論的失敗として、次のようなことがある。

I アメリカ人は直接的に表現する、日本人はあいまいである、等というステレオタイプによって、そのギャップを埋めようと、必要以上に直接的な表現(返答の初めにnoを持ってくる、等)をしてしまう。
II 第二言語であるため、あいまいな表現(日本語の「そうですね」にあたる表現、等)が思いつかず、直接的な表現をしてしまう。

これからの問題としては、以上のような分析結果をより客観性のあるものにするための、データの採取方法の確立があげられる。まず、よく指摘されるようにDCTによる解答として被験者の理想的な発話が書かれることが多く、必ずしもその被験者が実際のコミュニケーションの場で行う発話と一致するとは限らない。今回はそのギャップを埋めるために、同じ被験者に実際に会話してもらい、それもデータとして使用したが、量的には十分でなかった。しかし、実際の会話の中から反論の場面を取り出すことは、時間的に容易ではない。また、今回は二つの研究のデータを照合しながら分析を行ったため、発話の状況の条件などをそろえることができなかった。

継続的に、データを集めていく必要があるだろう。

また、このような語用論的転移の研究は様々な言語行為について行われており、それらを総合して、これからの語学教育に活かしていくことが望まれる。日本の英語教育において、語用論的能力の育成に対する関心は依然低く、具体的な教育方法もあまり提案されていない。しかし、Thomas(1983)にもあるように、第二言語によるコミュニケーションにおいて、文法的な誤りは話者がまだその言語を使いこなせないことの表れとして許容されることも多いが、語用論レベルでの失敗は往々にして「失礼だ」「不誠実だ」などという印象を与えてしまい、コミュニケーションにおいて大きな障害となりかねない。様々な場面や目的に応じて適切な表現方法の使用法を語学教育で教えていくためには、更に多くの言語行為についての研究を行なうと共に、それらを体系的にまとめていく作業が必要であろう。

参考文献

- Beebe, L. M. and Takahashi, T. 1989. Sociolinguistic variation in face-threatening speech acts: chastisement and disagreement. In Eisenstein, M.(ed.) *The Dynamic Interlanguage*. New York: Plenum, 199-218
- Beebe, L. M., Takahashi, T. and Uliss-Weltz, R. 1990. Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, R.C., Andersen, E. and Krashen, S. C.(eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House, 55-73
- Bergman, M. L. and Kasper, G. 1993. Perception and performance in native and nonnative apology. In Kasper, G. and Blum-Kulka, S. (eds.), *Interlanguage Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press, 82-107
- Brown, P. and Levinson, S.C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eisenstein, M. and Bodman, J. 1993. Expressing gratitude in American English. In Kasper, G. and Blum-Kulka, S. (eds.), *Interlanguage Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press, 64-81

- Garcia, C. 1989. Apologizing in English: politeness strategies used by native and non-native speakers. *Multilingua*, 8, 3-20.
- Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Garden City, New York: Anchor Books.
- Kasper, G. 1992. Pragmatic transfer. *Second Language Research* 8(3), 203-231.
- Naruse, M. 1993. Disagreement: Politeness phenomena in Japanese. Unpublished MA dissertation. Lancaster University.
- Tannen, D. 1984. The pragmatics of cross-cultural communication. *Applied Linguistics* 5(3), 189-196
- Thomas, J.A. 1983. Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics* 4(2), 91-112.
- Wolfson, N. 1989. The social Dynamics of Native and Nonnative Variation in Complimenting Behavior. In Eisenstein, M. (ed.) *The Dynamic Interlanguage*. New York: Plenum,

Appendix

日本人大学生による、英語の授業での会話 (「→」は、そこで反論が行なわれていることを示す。)

- F 1 : So, maybe we should think of a lot of, kind of, problems.
- M 1 : ... But, I think we should xxx each case. First, what or how. Just encourage them, or...
- F 1 : But, uh... but it depends.
- M 1 : It depends.
- F 1 : Um... depends on the ... problems.
- M 1 : Problems.
- F 1 : So... first, we should think about... the... problems.
- M 1 : Yes, yes, right.
- F 1 : Should we ask them, the person, about the love?
- M 1 : I don't think so.
- F 1 : No?
- M 1 : It will stimulate him.

- F 1 : Um... yes.
- M 1 : So...
- F 1 : So we should not ask about that.
- M 1 : Not strongly, just...
- F 1 : what do you think?(to others)
- Others : Mmmm...
- F 1 : We should encourage them to talk about their feelings.
- M 1 : It's our task.
- F 1 : So only one?
- M 1 : Only one.
- F 1 : That's all?
- M 1 : Yeah, that's all.
- M 1 : I think tourism is beneficial.
- M 2 : Yeah, of course.
- M 3 : They bring wealth.
- M 2 : Yeah, very good thing. But, ah, let's look at the matters from another angle. Ah, if we want to protect the environment, the tourism is a very big problem, as this article says.
- M 1 : Yes.
- M 2 : So, we have to think about environmental problem also.
- M 2 : Farmers find it difficult to live, ah, only depending on farmings, I think, so they have to, ah, work in tourism industry, I think.
- M 1 : But actually the farmers doesn't work in a tourism industry.
- M 2 : Ah, really. (laughter)
- M 1 : (laughter)
- M 2 : I think the job farmer is not stable.
- M 1 : You think tourism is harmful to the farmers?
- M 2 : No, no, I don't think so. To some degree I...
- M 1 : To some degree.
- M 2 : To some degree, yes.

日本人大学院生による日本語の会話(「→」はそこで反論が行なわれていることを示す。)

C: 簡単なキューだったらわかるから。

→A: あ、でも、ほら、教室英語でしょ。

C: 本当に教室英語。

→A: でも、せつめいのときも英語でするってことですか?

C: それはもうできないから……。

C: 初めの授業はいつも英語でやった。

→A: えー、でもさ、何か不安に思わないのかな。わかる子はいいけど、わかんない子は不安じゃないかしら。何言ってるんだろう先生、みたいなの。

C: あ、だから徹底的に全員あてますよ。

→A: え、でも、何か落ちこぼれちゃったりしないんですか? その子がアंकザイエティーで一杯になるとか。

C: 端からずっとあてていくと、わかんない子もわかる子の真似するだけなんですけど。

A: あ、そうか、そうか。

C: それに、そんな難しいことやらないんですよ。

A: あ、そうか、そうか。

→B: 私は、でもね、私はそれ、中3でやってら、やっぱりすごく不評だったの。英語でやると。何か、わからないとか言って。やっぱりすごく不安だったみたい。じゃあ何のために英語やってるんだろ、とか思ったけど。

C: そっか。

B: 一つに集中すればいいのかもしれない。まずは話すことからとか。

→A: 難しいですよ。でも、たとえば、発音と書くのと一気に教えた方が能率的かもしれないでしょ。もう大人になってるから。

C: グループワークは絶対にできないと思います。

→B: あ、そうかな。

C: だって私日本語でやらせても何も口きかないときあったもの。

B: これは絶対そうですよね。話す機会が増える、

ていうのは。

→A: でも、私、それすごい、あの、ダウトを感じるんですよね。サイレントな奴はどうなるんだろう (笑)。

→B: ああ。でも、サイレントな奴もね、私が思ったのは日本ではなるべく人数が少ない方がいいだろう。特にペアワークが一番いいんじゃないかと思ったの。

C: あ、ペアワークね。

A: そうそう。

B: あと、授業の雰囲気がよくなる。

→A: そうかなあ。

→B: でもね、死んだようにはならない……あ、どうだろ。死んだようになった?

C: 死んだようになったって言うか、場所によるかな。死んだグループもあるし、他の話しに盛り上がったグループもあるし。

日本語によるDCT

下記のような状況であなたなら何と言いますか。もし何も言わない場合はそのようにお答え下さい。

1. あなたは弟さんと昨日見た映画について話しています。あなたはその映画はあまりにも底が浅く、おもしろくなかったと思っています。

弟さん: あれはよかったよね。最近見た中で一番良いのの一つだな。

あなた:

2. あなたは大学の先生とこれからの勉強について話しています。あなたはイギリスの大学で勉強した方が、資料も豊富だしあなたの分野の専門家もいるしで良いと思っています。

先生: 留学する必要はないよ。日本だってその分野を勉強できる場所はあるし。

あなた:

3. 大学のセミナーである論文について話しています。あなたは其中であるデータの分析が不適当であることに気付いています。

先生: この論文を読んでご覧なさい。とてもよく書かれていますよ。

あなた: